

妊婦貧血の胎児におよぼす影響についての 臨床的および疫学的研究

(分科会総括研究報告書)

愛育病院
分科会長 松山栄吉

1. 研究目的

妊婦の貧血の検査や治療に関心が持たれるようになってから、すでに約20年が経過した。貧血が放置された当時と異なって、現在ではどこの医療機関においても、貧血に対する管理はかなりよく行なわれている。

従来この方面における研究はいろいろ行なわれ、妊娠中毒症、周産期障害、新生児血液異常などに関する研究などが報告されてきた。しかし疫学的に解明された部分はほとんどなく、とくに最近の状態については、どの程度に貧血の影響が現れているか不明である。

また従来妊婦の貧血について設けられたWHOの基準が、妊婦管理の充実した現在において妥当であるかどうかも再検討してみる必要がある。このような観点から妊婦の貧血について、貧血発生の時期と貧血の程度とに分けて、その影響について疫学的な調査と分析を行なうことが本研究の主目的である。

2. 研究内容

本研究は昭和52年度より3年間継続して行なわれた。その研究開始に当たり、各研究者の分担研究課題を次のように設定した。

分担研究課題

- | | |
|-----------------------------|------|
| I 妊婦の貧血と新生児の血液障害に関する研究 | |
| 分担研究者：順天堂大学医学部産婦人科教授 | 古谷博 |
| II 妊婦の貧血と妊娠中毒症に関する研究 | |
| 分担研究者：旭川医科大学産婦人科教授 | 清水哲也 |
| 研究協力者：横須賀共済病院産婦人科部長 | 永井生司 |
| III 妊婦の貧血と胎児・母体に及ぼす影響に関する研究 | |
| 分担研究者：愛育病院産婦人科部長 | 藤井仁 |
| 研究協力者：東京慈恵会医科大学青戸分院産婦人科助教授 | 有広忠雅 |
| 同：慶応義塾大学医学部産婦人科講師 | 河上征治 |
| 同：福岡大学医学部産婦人科教授 | 白川光一 |
| IV 妊婦の貧血と周産期障害に関する研究 | |
| 分担研究者：国立岡山病院産婦人科部長 | 藤森博 |
| 研究協力者：岡山大学医学部産婦人科教授 | 関場香 |
| 同：岡山市市民病院名誉院長 | 高知床志 |

以上の研究者は、それぞれグループ別に研究を進めるとともに、3年目の昭和54年度には、本研究の主目的である疫学調査に主力を注いで研究を進めた。すなわち過去2年間の研究結果を基に、疫学調査の調査表を作成し、各機関はこの調査に協力するとともに、従来の研究も併行した。そして疫学調査の集計は中央（愛育研究所）においてコンピュータ処理を行ない、分析した。

3. 研究結果

I 個別研究

(1) 古谷 博：

関連病院にて妊婦貧血の疫学調査を行なうとともに、妊婦および新生児 ferritin の測定を行ない、血色素量その他の従来のパラメーターではとらえられなかった体内における鉄の動態が、血清 ferritin でかなりの程度に明らかになることを証明しえた。

(2) 永井 生司：

妊婦の葉酸を検索し、その半数に葉酸低下が、11%に葉酸欠乏が認められ、わが国において妊婦貧血治療の上で、葉酸の意義を重視する必要があることを明らかにした。

(3) 河上 征治：

妊婦の貧血の産褥初発排卵に及ぼす影響について、分娩後の追跡を行ない、貧血群に初発排卵時期の遅延することを確認した。

(4) 有広 忠雅：

貧血妊婦の胎盤について、とくに組織学的研究を重点に検索を行なった。そして対象群に比して線維化を著明に認めた。さらに胎盤重量、胎児体重、E₃値などの関連性についても検討した。

(5) 白川 光一：

特殊血液疾患を有する妊婦について、妊娠、分娩経過や新生児の状態を詳細に観察し、その病態を分析検討した。

(6) 藤森 博：

妊婦の循環血液量、循環血漿量、循環血球量、総血色素量を測定することにより、妊娠貧血と診断する基準の設定を試み、とくに妊娠の時期や分娩時によって基準値に変化があることを提唱した。

(7) 関場 香：

除鉄ラットについて、各組織に含まれるミトコンドリアや含鉄酵素の活性低下について検索した。さらに妊婦と新生児の血清フェリチンを検索し、その相関性より、妊婦貧血の管理には血清フェリチンをパラメーターとして導入する必要のあることを提唱した。

(8) 高知 床志：

分娩時の胎盤血液の胎児への移行について、娩出後の新生児把持の状態によって新生児の血液所見に及ぼす影響を検索し、新生児に血液環流を保護する防御体制のあることを示唆した。

II 疫学調査

各研究機関において記入した調査票を中央において集計し、コンピューターによる分析を行なった。調査対象は初診が妊娠満 11 週以前で、分娩まで継続管理しえた症例で、分娩が昭和 54 年 1～9 月までに行なわれたものを選んだ。調査総数は 3,776 例に達したが、そのうち分析しえた 3,441 例について検討した。

多数の項目について妊婦貧血との関連性の有無の分析を試みた。その結果、24 歳以下の若年初産婦に中等以上の貧血の占める割合が高いこと、貧血群に胎盤重量の増加が認められること、また貧血群に浮腫の出現頻度が高いことに有意差が認められた。しかしそれ以外では高血圧、蛋白尿、胎児仮死、SFD の出現などには、影響を認めることはできなかった。

妊婦管理、とくに貧血の検査や治療がよく行なわれている現在において、このような結果はどう評価すべきか、また将来はどう考えるべきかについても検討を行なった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

妊婦の貧血の検査や治療に関心が持たれるようになってから、すでに約 20 年が経過した。貧血が放置された当時と異なって、現在ではどこの医療機関においても、貧血に対する管理はかなりよく行なわれている。

従来この方面における研究はいろいろ行なわれ、妊娠中毒症、周産期障害、新生児血液異常などに関する研究などが報告されてきた。しかし疫学的に解明された部分はほとんどなく、とくに最近の状態については、どの程度に貧血の影響が現れているか不明である。

また従来妊婦の貧血について設けられた WHO の基準が、妊婦管理の充実した現在において妥当であるかどうかも再検討してみる必要がある。このような観点から妊婦の貧血について、貧血発生の時期と貧血の程度とに分けて、その影響について疫学的な調査と分析を行なうことが本研究の主目的である。